



写真と記事で綴る
千手会の軌跡



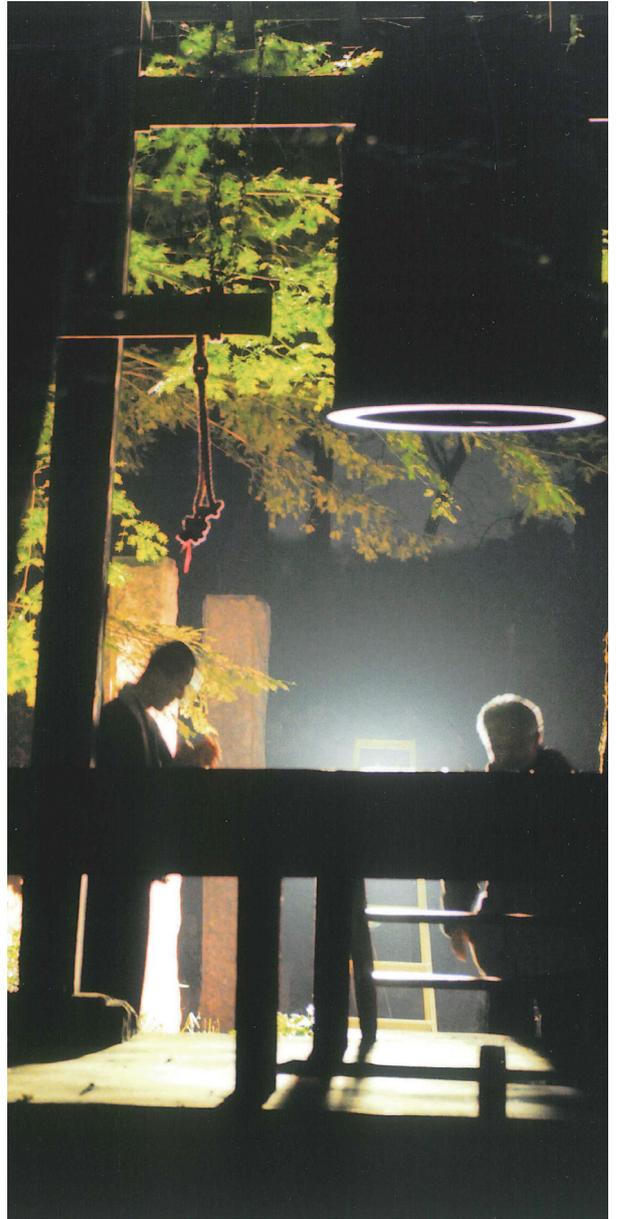


みちしばの園・**仏教会交流会**

井野・千手院

去る二月末に市福祉課の主催で佐倉市仏教会の人達と佐倉市中心障害者福祉作業所「みちしばの園」の園生及び保護者との交流会が井野の千手院で行なわれた。

午前中三十分程、園生による院の内外の清掃を行い昼食を共にした後、午後から親達との懇談会が行われた。順天堂大学助教授鈴木克明先生の障害者と福祉に関する講話を聴いた後、親達の日頃のな



なやみが訴えられた。

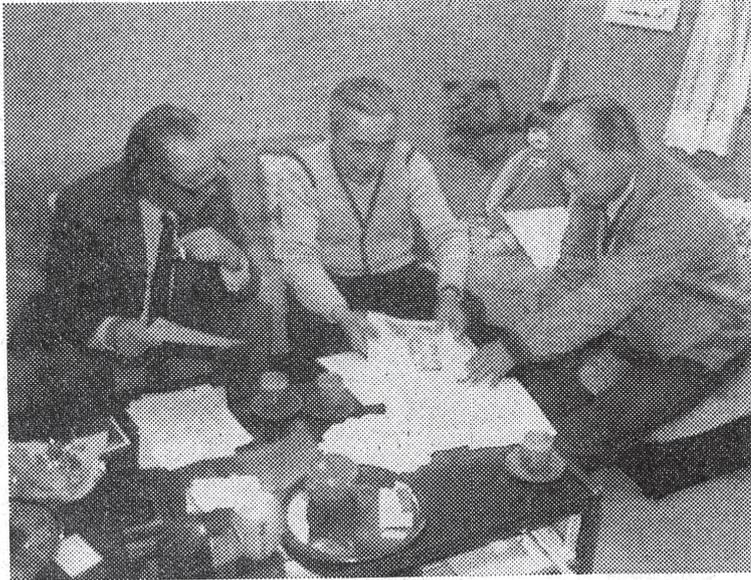
障害者にとって最大の目標は、一日も早く社会に復帰し自活の道を立てることである。特にみちしばの人達にとっては、就職が望ましい姿であるが、現在のような社会情勢のもとで心身障害者というハンデを負った者にとっては、就職ということは極めて困難な状況にある。

今回の交流会は、市内には数多くの寺院があり、また障害者に対して深い理解を持っていただける仏教会の人達の協力を求めて、寺院を障害者の社会復帰の場として考



えられないかという発想から今回の会が持たれたのである。まだ、結論はでていないが、今後これを機会に寺院との交流を深めその可能性を検討していきたいと考えている。

「無理せず…挫折せず…」



ミニコロニー建設について話し合う小酒井さん（中央）ら

合言葉に「コロニー建設へ」

基金1億円調達めざす

佐倉市の手をつなぐ親の会

「行政におんぶせず、自分たちの手で福祉施設を」と、佐倉市内の心身障害者を持つ親たちのグループ「佐倉市手をつなぐ親の会」（小酒井国治会長、九十八人）は、心身障害者収容施設建設基金準備委員会（小川要一委員長）を結成、一億円の基金作りに乗り出した。気の遠くなるような目標だが、「無理をせず挫折せず」を合言葉に、会員たちの決意は固い。

一般にも賛助を訴え

同会の調べによると、同市内に住む知恵遅れの人たちは二百五十七人で、うち重度障害者八十六人、中度障害者百十一人、軽度障害者六十人。同会は四十五年の発足以来、知恵遅れの人たちのためにミニコロニー建設を目ざし、チャリティー音楽会やバザーの売り上げなどを同市社会福祉協議会に預託してきたが、これまでに集まった金は七十七万円。一般の人たちの寄付を含めても合計二百三十六万円、このままでは、いつミニコロニーが実現するかわからない状況。知恵遅れの人を持つ親たちにとって心配なのは、親が死亡したあとの面倒をだれがみるのかの問題。このためには、社会復帰の難しい知恵遅

れの人たちが、安心して暮らせるコロニーを、なるべく早く実現すること。会員たちは「行政におんぶしてばかりはられない。自分たちの手でできるだけの努力をしよう」と、同委員会を結成した。廃品回収など今後も同委員会では、まず会員たちから一口千円の会費を集めたり、昨春秋に二回行った廃品回収の収益などを同福祉協議会の預託金と合わせ信託銀行に預け、基金作りの第一歩を踏み出した。今後もバザー

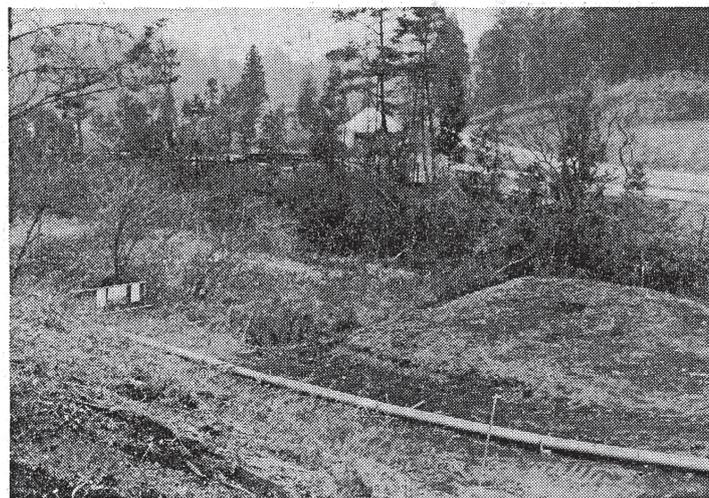
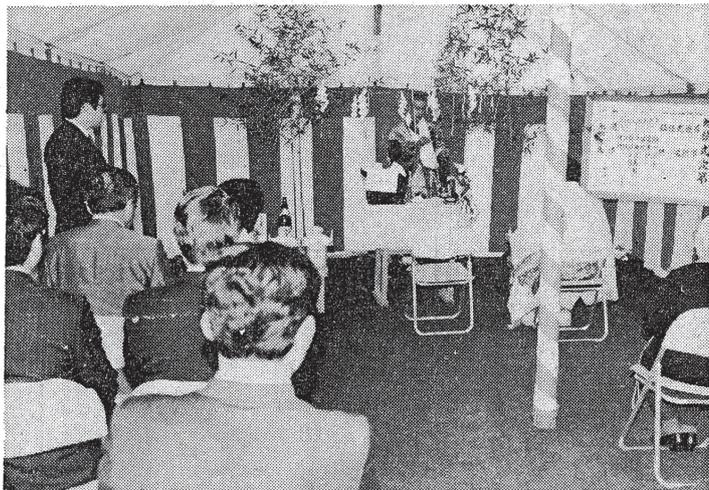
や廃品回収を続けていくが、健常者にも同委員会への賛助会員になってもらうよう強く訴えていくという。
連絡先は、佐倉市井野町九四の五〇、同親の会会長、小酒井国治さん方（電04334・899・6539）と同市中尾余二七、同準備委員会（電04334・84・0340）。

私財投げうち更生施設

「さくら千手園」

6月開園めざす

「このままでは死にきれない」と、高齢化する精神薄弱者を持つ親の苦しみを見かねた佐倉市内にある寺院が、私財を投げうちて精神者の更生施設づくりに取り組んでいる。国や県、市の補助を受けてはいるが、総工費で約三億円の大きな事業だけに、多額の借金も抱えている。準備を進めて一年半、障害を一つずつ克服して先ごろ、地鎮祭にこぎつけた。五月末には待望の園舎が完成、六月一日開園をめざしている。佐倉市内では初の精神者更生施設。



この寺は、佐倉市井野にある稲野山千手院(せんじゅいん) 眞言宗、高橋光蓮住職。同院から北西へ約一・五離れた同市青菅(一〇一九)地に精神薄弱者更生施設「さくら千手園」を建設する。

主に年齢の高い重度精神者や、程度は低くても家庭での生活指導が難しい精神者を収容するのが狙い。

建物は鉄筋コンクリート二階建て(延べ床面積千三百二十六平方尺)。園生の居室十四部屋すべてに日があたるよう設計されたため、全体はV字型。ほかに作業室や相談、医務、静養室など。重度二十人、中軽度三十人の計五十人を収容する計画。

事業総額は約三億円。補助金のほか高橋住職と恵下(えげ)物尊副住職が計二千八百万円を寄付、さらに借入金も充てる。三千六百五十平方尺の敷地も千手院が提供、私財を投げ打った事業だ。

計画の推進者で同市仏教会志津支部長を務める恵下副住職は「三年前に市の福祉課から仏教会に対し知恵遅れの子供たちを救えないかと話があったが、解決の糸口はつかめなかった。その折、精神者を持つ親から、このままでは子供を残して死ぬに死ねない、と苦しみを話された。施設建設のための資金集めも長期にわたるといって深刻に悩んでおられ、聞いていて身につまされた」と、動機を語る。

その後、壇家総会を開いて敷地を確保し経営母体となる社会福祉法人千手会(高橋光連理事長)が設立され、準備が進められた。

同市内には約二百五十人の知恵遅れの人がいるといわれ、うち八十人余りが重度障害者。県内の精神者簿登録者は約一万一千四百人。加

えて医療技術の進歩で精神者の寿命が延び中・高齢化するなど家族の悩みは深刻の度合いを増している。

さくら千手園は、印旛郡市の精神者を対象としているが「収容者に限りがあるので、家庭的に恵まれない人を優先する」方針だ。

恵下副住職は「更生施設だけでは片手落ち。理想としては授産施設や通所寮、精神者専用の老人施設も必要です」と、さらに心を痛める。

千手院は、同市福祉作業所みちのくに園に土地を提供するなどして、これまでも社会奉仕に力を入れてきた。

さくら千手園の工事は一月下旬、地鎮祭にこぎつけた。とができ、本体工事に着手した。取り付け道路の関係で約二カ月遅れたが、五月下旬には完成、六月一日開園の予定。指導員はじめ看護婦、栄養士ら二十五人が常駐する計画だが「地域の人々やボランティアの方々の協力を仰いで、施設を美のあるものにしていきたい」と(恵下副住職)と話している。

う設計されたため、全体はV字型。ほかに作業室や相談、医務、静養室など。重度二十人、中軽度三十人の計五十人を収容する計画。

事業総額は約三億円。補助金のほか高橋住職と恵下(えげ)物尊副住職が計二千八百万円を寄付、さらに借入金も充てる。三千六百五十平方尺の敷地も千手院が提供、私財を投げ打った事業だ。

計画の推進者で同市仏教会志津支部長を務める恵下副住職は「三年前に市の福祉課から仏教会に対し知恵遅れの子供たちを救えないかと話があったが、解決の糸口はつかめなかった。その折、精神者を持つ親から、このままでは子供を残して死ぬに死ねない、と苦しみを話された。施設建設のための資金集めも長期にわたるといって深刻に悩んでおられ、聞いていて身につまされた」と、動機を語る。

その後、壇家総会を開いて敷地を確保し経営母体となる社会福祉法人千手会(高橋光連理事長)が設立され、準備が進められた。

同市内には約二百五十人の知恵遅れの人がいるといわれ、うち八十人余りが重度障害者。県内の精神者簿登録者は約一万一千四百人。加





千手院からの寄付山林



さくら千手園敷地
造成工事



さくら千手園敷地完成





さくら千手園建設工事



進入道路完成



障害者入所支援施設
さくら千手園竣工



精薄者に生きる力を

訓練や指導を行う

更生施設「さくら千手園」が完工

佐倉

佐倉市内で初めての精神薄弱者更生施設「さくら千手園」(市内喜貴、五十人収容)の完工式がこのほど、同園で行われた。十八歳以上の重度精神障害者や家庭での生活指導が難しい精薄者を対象に、更生に必要な訓練や指導を行うため、社会福祉法人・千手会(高橋光連理事長)が建設した。



【ともに生きる福祉をめざし開園したさくら千手園】

準備から三年の歳月をかけてようやく完成、六月開園にこぎつけた。総費三億円は国や県、市の補助を受け、同市井野、千手院が敷地を提供、高橋住職と恵下均副住職の寄付金でまかなわれた。

十八歳から五十歳までの園生の多くは重度精神障害者で半数が六月に、残りは七月にそれぞれ徐々に受け入れ、このほど定員の収容を終えた。

印旛郡市を中心に県内ほぼ全域から入所。二十四人の職員が指導や生活の世話を続けている。

手づかみの食事からスプーンが持てるまでになるには、早い精薄者で一年はかかるといわれる根気のいる仕事。いわば、これからの運営の正念場。弱者救済に向けて長い地道な活動の始まりだ。

完工式には、菊間健夫佐倉市長や古川弘興精神障害者愛護協会長の百四十人が出席、「私財を投げうっての尊い行為に頭が下がる」と挨拶を送った。また、園生を代表して父兄が「養護学校を卒業後、どうしたらよいかと思索にくれていた。これで、これからもわが子と一緒に生きていける」と感謝の意を表した。

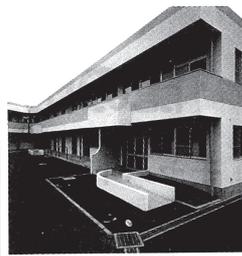
同園では「最初はなれるまでに時間がかかると思ってたが、『ともに生きる』姿勢を持ち続け、家庭と地域社会が協力できる施設づくりをめざしたい」と話している。



さくら千手園竣工式典

「精神薄弱者更生施設 さくら千手園」が完成

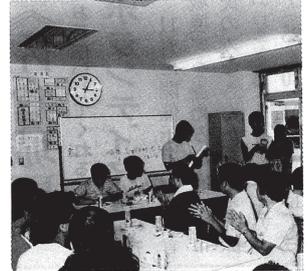
社会福祉法人千手会（高橋光連理事長）が、青菅一〇一九番地に建設していた市内で初めての精神薄弱者更生施設「さくら千手園」が完成し、8月8日に開所式が行われました。



▲千手園外観

この施設は、精神薄弱者の幸せを願い、主に年齢の高い重度のかたと、中・軽度であっても家庭で生活指導が困難であると思われるかたを収容し、保護するとともに、その更生に必要な指導及び訓練を行います。建物は、鉄筋コンクリート二階建て（延べ床面積千三百二十六・九平方メートル。園生の居室十四室すべてに日があたるように設計されており、中庭をはさんでV字型になっています。このほか、作業室、会議室、相談室、医務室、静養室、調理室な

▼誕生会は園生の楽しみの一つ



どがあり、収容定員は重度二十人、中軽度三十人の計五十人。入所はすでに六月から始まっており、園生は二十五人の職員の指導のもとで、日課表に従った規則正しい生活のなかで、日々更生に励んでいます。施設の建設にあたっては

さくら千手園→佐倉市青菅1,019番地 ☎2008

ろいろうと力を尽くされてきた恵下均専副理事長は、「多くの皆様のご協力で建設することができ、感謝しています。これからは、園の運営方針でもある家庭や地域の皆さんとも一体となり園生とともに生きる」姿勢を大切に、一歩一歩着実に前進していきたい」と話してくれました。

現在、県内でもこの種の施設は少なく、千手園は今後地域社会の中で、精神薄弱者の福祉施策推進の一端を担っていくものとして期待が寄せられています。

※千手園では栄養士一名を募集中。上記までご連絡を



作業ハウス建設



作業用農地造成
(現在はさくら福寿苑敷地)



初めてのワゴン車第1号



施設の愛犬チビ

千葉日報 1989 (昭和64年) 1. 3



3月に機能回復訓練棟完成
佐倉市「さくら手園」

が、この事業は、すべての町民に利用されるものとして大きな期待がかけられている。

佐倉市青菅にある重度精神薄弱者更生施設「さくら手園」(高橋光運理事長、入所五十人)で多目的作業場を兼ねた機能回復訓練棟(約三百四十平方メートル、鉄骨平屋)の建設が進められており、三月下旬に完成する。

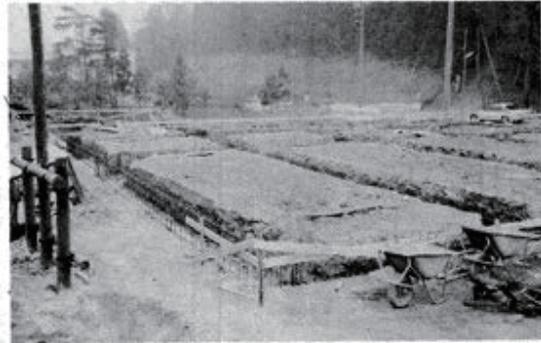
訓練棟は本館東側隣接地に建設。作業場兼機能回復訓練

室は百二十畳の広さで、木工製作など屋内での作業が可能になるほか各種行事にも利用。ほかに十六畳の和室、シャワー室、静養室などが設けられる。

同園は六十二年六月にオープン。初年度は生活指導が中心だったが、二年目からは木工、農耕、手芸など五班編成で作業指導を行っている。

だが、屋外作業が主で雨天が続くなどした場合、不便をかこっていたが、同棟の建設で作業指導が一層充実、強化されることになる。

また、中軽度入所者を対象に「組み立て、外注作業を社会復帰の一環として取り組みたい」と話してお

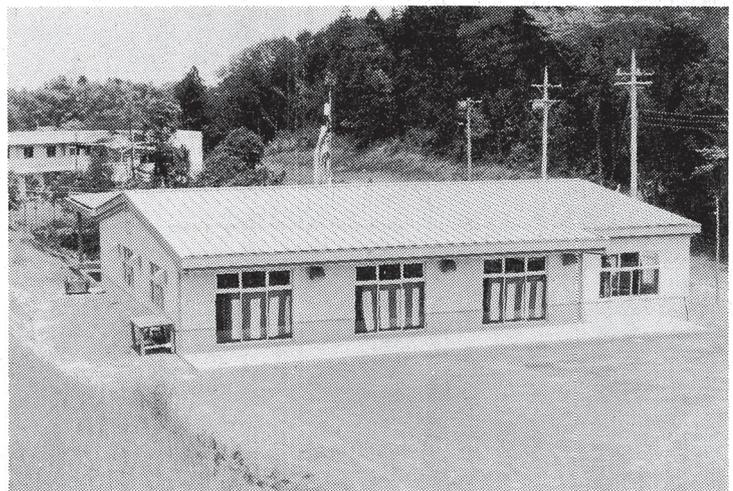


機能回復訓練棟の建設が進む—佐倉市

り「大きな足がかりになる」(恵下均専務部長)と期待。さらに将来的には在宅の心身障害児(者)を対象に「通所更生」のできるようなデイサービス事業にも利用、入所の園生と作業をともにして機能回復を図るなど、施設的人的、物的機能を地域に役立てていけるようにできれば」と話している。

多目的ホール棟建設工事

千葉日報 1989 (平成元年) 5. 9



在宅障害者の療育も

さくら手園 機能訓練棟が完成

佐倉市青菅の重度精神薄弱者更生施設「さくら手園」(高橋光運理事長、入所五十人)が建設を進めていた作業、機能訓練棟が完成したこのほど、落成式が行われた。

訓練棟は重量鉄骨造りで延べ床面積三百四十一平方メートル、作業や機能回復訓練を行う百九十二平方メートルの多目的ホールと和室二十七平方メートル、静養室

二十四平方メートルはじめ倉庫、シャワー室などがある。

佐倉市と中央競馬社会福祉財団の補助、助成を得ており総工費は五千万円。

開園二年目を迎えた恵下均専務理事は「一年目は園生、家族、職員の間関係構築を、二年目には生活、作業指導に重点を置いてきた。だが昨年は長雨続きで野外活動がたび

【完成した手園の多目的作業、機能訓練棟】

たび中止になり、結果的には園生にウツをつくような形になった。これで予定通りの作業や行事ができる」と、完成を喜んでいる。

成人が対象の重度精神障害者保護、更生施設である同園では、訓練棟を入所者のみにとどまらず広く在宅障害児者にも活用、園の人材を生かし療育に取り組みたい考え。

県社会部障害福祉課によると、保護更生施設のワケを超えて在宅障害者にも門戸を広げ、地域社会に開かれた形で施設ぐるみ運用していく例は県内で初めてといわれ、非常に意義のある試みとして注目している(森山幹夫課長)と話している。

多目的ホール棟竣工



生活訓練棟ブラボーハウス竣工
(現在は短期入所棟)



まちのわだいの



精神薄弱者通所更生施設

『木の宮学園』が竣工

社会福祉法人千手会せんじゆかい(高橋光連理事長)が、佐倉市青菅一〇

五一番地)に建設していた精神薄弱者更生施設『木の宮学園』(渡辺映子施設長)が完成し、

7月3日(金)に竣工式が行われま

した。この施設は、十八歳以上の精神薄弱者を対象とした通所

型の施設で、建物は鉄筋コンクリート二階建て(延べ床面積七

百十六・八九平方メートル)で、施設長をはじめ指導員六人、書記、

調理員、嘱託医の計十一人の職員が指導にあたります。入所は

すでに四月から始まっており、園生は、作業・生活を中心とし

た小集団によるプログラムと、個別ケアの二本の柱を主体とし

た職員の指導のもとで、日々更

▶個性を生かした指導を



◀木の宮学園外観



生に励んでいます。

竣工式には、県関係、県議会

関係、市長、議長、社会福祉協

議会会長をはじめ関係者多数が

出席し、同学園への期待を語り、

祝辞を述べました。なお、同学

園の隣接地には、千手会が運営

する入所型の更生施設『さくら

千手園』(昭和六十二年六月開

所)があり、今回の『木の宮学

園』の完成により、障害者の二

ーズに対応するなかで、地域生活を支えるための援助サービス
の拠点化が図られたことになり
ます。

〔社会福祉法人千手会 木の宮
学園〕案内

ユーカーが丘線中学校駅下車
徒歩10分 ☎(463) 1008



木の宮学園建設工事

障害者支える拠点に

木の宮学園が竣工

佐倉 成人精薄者の更生施設

成人が対象の通所型精神薄弱者更生施設として四月に開園した佐倉市青菅、社会福祉法人木の宮きのみや学園(定員四十人)の竣工式が三日、行われた。五年前にオープンした入所

型の同施設「さくら千手園」(定員五十六人)に隣接して建設された。これによりニーズに応じた、障害者の地域生活を支える援助サービスの拠点化が図られた。



木の宮学園は、十八歳以上の精神薄弱者を対象とする通所施設。建物は鉄筋コンクリート二階建て(延べ床面積七百二十平方尺)。国や県、市の補助を得て総工費一億二千二百万円を投じ昨年九月に着工、四月に開園した。園長はじめ指導員六人、書記、調理員、嘱託医の計十一人のスタッフがおり、作業と生活を中心とした小集団によるプログラムと個別ケアの二本柱で指導。集団プログラムはスポーツによる体力づくりや音楽など

の感性、陶芸・木工などの創造性、作業、生活などの六分野があり、個別ケアは専門性の高い治療教育を提供するとしている。また、年間行事として社会生活学習を目的に月に一度のペースで、夏祭りやハイキング、作品展などを計画。この日、行われた竣工式には、菊間健夫佐倉市長はじめ関係者多数が参列した。運営の社会福祉法人千手会、恵下均理事長が「障害者福祉の憩いの場として、地域に根ざした福祉活動を続け、今後さらに利用者へのニーズに応じた施設、システムづくりに努めたい」とあいさつ。また、来賓の円道寺茂・佐倉市社会福祉協議会長や古川弘・県精神薄弱者愛護協会会長らが「精神薄弱者のための通所施設は、全国的にもまだまだ不足している。施設福祉と在宅福祉を二元化した地域福祉が

重視されながら、なかなか実現しない」などと遅れている精神薄弱者の援助サービスの現状に触れて木の宮学園への期待を語り、祝辞を述べた。隣接地には千手会が運営する入所型の更生施設「さくら千手園」があり、昭和六十二年六月にオープンして以来五年目になる。デイサービスをふくめ、今回の通所更生施設の完成で、障害者のニーズに応じた地域生活を支えるための援助サービスの拠点化が図られたことになる。



木の宮学園外観

障害者グループホーム山桜竣工



特別養護老人ホームさくら福寿苑竣工



歌や踊り、プレゼント……

さくら千手園 華やかXマス会

今年六月に開園した佐倉市青菅の精神薄弱者収容施設・さくら千手園(高橋光連理事・長、園生五十人)で初めての「クリスマス会」が、このほど開かれた。

園生の父兄や地域のボランティアが一緒になって「開かれた園」としての交流を深めた。

トナカイやサンタクロースのはり絵を手作り、窓や天井を飾りつけ、みんなで三角ボウシをかぶって雰囲気盛り上げた。

笑顔を絶やさなかった人や人にやさしくした人に恒例の「なんでも賞」が贈られたあと、開園六カ月の歩みがスライドで紹介された。

仲間が大写しになるとキャンヤの鳴き声が飛び、朝の体操や洗濯風景などが写し出されていた。

メーンは園生によるバンド発表。シンバルやカステネット、タンバリンを手に、タクトに合わせてシングルベルや赤ハナトナカイが始まると手をたたいたり、ピョンピョン飛びはねて身体を動かしたりリズムをとって大合唱。

最後に職員がふんした二人のサンタクロースが大きな荷物を抱えて登場すると、プレゼントを奪い合うようにしてもらい大喜び。さらに会場を作業所から食堂に移して立食パーティーで楽しい一日を過ごした。

同園には知恵遅れや自閉症児者の五十人が入園。十五歳から五十歳までの人がいるが、大半は二十歳前後。若い職員が多く、一緒になってにぎやかに運営されている。

開所当初は、園生も初めてで職員や仲間同士のコミュニケーションが、入園六カ月で掃除やあいさつができるようになるなど、徐々に慣れ親しんできた。

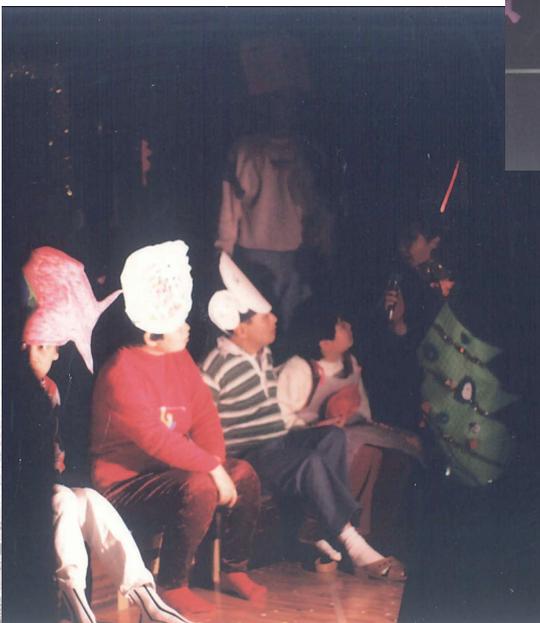
クリスマスパーティーは、心身の機能訓練事業として企画「今年最後の良い思い出になりました」と、同園では話している。



【楽しい1日を過ごしたさくら千手園の初めてのクリスマス会】



第1回クリスマス会風景



地域と交流、夏まつり

盆踊りや模擬店

園生の生活ぶりも紹介

さくら千手園

十八歳以上を対象に佐倉市「園中庭」なるかに開かれ、内での初めての精神弱者更生施設として昨年六月に開園した社会福祉法人「さくら千手園」(同市青菅、高橋光輝理事長、五十人収容)でこのほど、地域住民と園生の交流を深める「第一回夏まつり」が、下右に企画された。



【地域住民と園生が楽しく交流したさくら千手園の夏まつり】

まつりには、自治会の役員や市ボランティア協会、地域住民の約百五十人が集まり、祭ばやしや浴衣を思い思いの衣装に身を包んだ園生で楽しく盆踊り。やぐらの周りに囲まれた焼きそばやフランクフルト、お好み焼き、そうめん等をほおばったほか、輪投げや金魚すくいにはなやんだ一時を過ごした。

また一階の部屋では園生の生活ぶりをビデオ放映。農耕班が収穫した大きなすずやトマト、手芸班の刺し子、クロムスアッチ、大工班のコースター作品などが展示、紹介された。

開かれた園中庭をめぐり、園生には、地域の散歩コースと近隣公園のゴミ拾いを清掃班が多岐にわたっており、地域の美化運動にも力を入れている。

だが、家庭では基本的な生活さえままならない状態だった園生が中心だけに、作業着に着替える準備などに時間がかかり、実際の作業効率はあまり上がっていない。しか

し園外行動の楽しみの一つになつており「今までの生活では考えられないほどの進歩ぶり」と、園生では目を細め、その成長を喜んでいる。

一方、夏まつりに招待された若手台やユーカーが丘の人たちは「とても意義のある催しだ。これからは、こうした施設を地域の中に置き、互いが交流を深めて社会的弱者を包み込んだ地域づくりが求められるのではないか」と同園の運営に理解を示していた。

第1回千手会夏祭り (現在の千手会フェスタ)

ハツピ姿で夏の夜満喫

佐倉市青菅にある精神弱者更生施設さくら千手園(恵下均尊園長)でこのほど、恒例の「納涼夏まつり」が開かれ、園生たちと家族、地域の人たちが交流し、楽しい夏の夜のひと時を満喫した。

佐倉青菅の「さくら千手園」



さくら千手園で開かれた納涼夏祭り

地域の協力で納涼夏祭り 喜ぶ園生

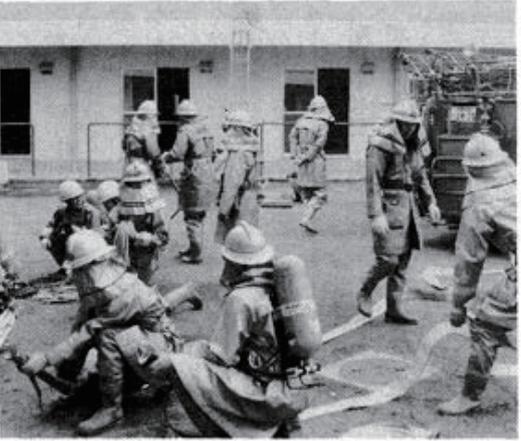
第1回総合防災訓練風景

千葉日報 1988 (昭和63年) 12.12



町外組 二市防 倉消 佐消
精薄者施設で防災訓練
本番へ問題点チエツク
 佐倉市青宮の重度精神薄弱者更生施設「まぐろの手園」(高橋光運理事長、五十人入所)でこのほど、佐倉市外二町消防組合の「防災訓練」が行われた。
 同消防では、特養老人ホームや養護施設、三階以上の高層建物など管内六百施設を対象に「特殊建物火災防御計画」を作成している。
 訓練は、いざ本番に備えこれらが計画通り運ぶかどうか、消防車両など十二台を繰り出して問題点をチェック。人命救助と延焼を最小限に

と定めることをポイントに、耐火構造の建物から出る煙対策と、入所の精薄者救命のため人命救助班が出動、屋内侵入路の確認などを行った。
 調理室から出火の想定で二一九番の第一報を受けて消防車が現場に到着したのが約六分後。隣接団地と施設の防火水槽の二系統からホースをひいた。
 消防署の高藤克男署長は、「緊急時の場合、到着はもう少し早まるだろう。七〜八分で鎮火できるが、煙が充満するので、死者や負傷者を出さ



千手園で行われた消防組合の防災訓練

ないことに最も力を入れていく」と、訓練の目的を話す。
 今回は消防側の独自訓練のため入所者は別行動をとった

が、同園では十六日前に園としての避難訓練を行うことにしている。



楽しい…ベイサイド航海

「もう一度乗りたい」の声も

障害者が体験乗船

「県視察船「若潮」 東京湾一周70キロの旅

船に乗る機会の少ない障害者たちに、洋上体験をしてもらおうと22日、県の所有するハイテク港湾視察船「若潮」に乗って、県内の障害者50人余りが、東京湾を一周

した。あいにくの曇り空、雨交じりの天候で、視界はもう一つながら、波の上を滑る船に、一様に「もう一度乗りたい」との声が上がった。



小玉さんのガイドでベイサイドを見ながら洋上体験を楽しむ、さくら千手園の園生たち

洋上体験したのは、佐倉市青菅の精神薄弱者更生施設「さくら千手園」(高橋光運理事長、藤原吉平園長、園生五十八人の園生や職員など、副園長の恵下均尊さん(画)に引率された約九十人。

午前十時過ぎ、千葉港中央埠(左)頭から園生が乗り込んだフルと白の双胴船が、東京湾に出发。右手にメッセやマリンスタジアムなどが並び、鼻張新都心を見て、ベイサイドを時速二十(約三十五)で進んだ。田村利雄船長(五)が「まよひは曇っている

が、海上は静か。安心して一階の会議室へ、二階のサロンに思い思いに席を取り、次々見える千葉の新名所に目ぼくきつけ。しかし浦安のホテル群は確認できたものの、楽しみにしていた東京

デイズニールランドは、曇ってほとんど見えず、残念そうな表情に。

そこからは東京湾を横断、大型タンカーが横付けする袖ヶ浦沖の京葉シーバースを回り、約二時間かけ七十(七)を航海、無事中央埠頭に寄港した。乗船当初、物珍しさもあって、一階と二階を行き来していた園生も、船が陸地から離れ、周りが海ばかりになると、やや飽き気味。中には気分が悪くなる者もいた。すかさずガイド役の小玉美恵さんがカーテンを開け、ビデオ上映を始めるなど、気配りも十分だった。

寄港後、園生を代表して加藤進さん(三)が「もうもありがとうございました。また来て乗りたいと思います」と乗務員らにお礼を述べた。園生はこの貴重な洋上体験を総にするつもりとか。

若潮は平成元年六月に就航。全長三十三(一)八と小振りながら、ハイテク機器を搭載し、通訳付きの洋上会議ができる県自慢の港湾視察船。障害者の洋上体験は、同船が平成元年六月に就航して以来、これが五回目。これまでが丘養護学校など肢体不自由児者や盲学校、ろう学校の生徒たちが乗船している。

オリンピック金メダリスト 鈴木大地さん(中央)が訪問



法人広報誌「ひだまり」創刊号を発刊



編集・発行＝社会福祉法人千手会広報委員会 創刊号 1997年6月1日 年3回（6・10・1月）

ひだまり

さくら千手園 佐倉市青菅1019 043-462-2008 木の宮学園 佐倉市青菅1051 043-463-1008

目次	
創刊にそえて	1
さくら千手園	2
平成9年度運営方針	2
千手園日記	2
作業班紹介(園芸班)	3
クラブ紹介(写真・水泳)	3
木の宮学園	4
平成9年度運営方針	4
木の宮日記	4
作業班紹介(木工班)	5
グループ活動紹介 (マラソン・音楽)	5
保護者会	6
アプローチ	7
治療教育学(その1)	7
表題紹介	7
情報フラッシュ	8



第11回運動会（5月25日・青菅小学校体育館）

創刊にそえて

理事長 恵下 均

花を尋ねれば香りに衣に満つ

ひとつのことに一生懸命取り組んでいると、長い間には、人としての深みが自然と身についてくるという高僧の教えがあります。

社会福祉法人千手会は、十周年を迎え、ここに関わったすべての人の努力により、根はしっかりと張りめぐり、幹は少しづつ太くなり、勢いある枝葉が伸びてきています。そして、この「ひだまり」によって、味のある花を咲かせることができるのではと期待しています。

「さくら千手園」・「木の宮学園」の広報誌として、多くの方に読んでいただき、相互理解の掛け橋として、福祉に携わる私たちの切磋琢磨の場として、実りあるものになるよう努力していきます。

新しい福祉の潮流の中で、障害者の個々の願いや柔軟な発想をしっかりと受けとめ、心の中までほかほかと暖かくなるようなメッセージを送ることができればと願っています。